



須田直吉さん近影 (H.25.8.8)

6月29日に、相模原市で平成25年度の友松会総会が開かれました。その席上で卒寿を迎えられた会員への、記念品贈呈が行われたのですが、その折に受賞者代表として挨拶をされた、藤沢支部の須田直吉さんは戦争で苦労された方のように、ぜひお話を伺って友松会のホームページに載せたいと思いました。

そこで総会終了後に須田さんに連絡してお願いし、8月8日に藤沢市のお宅をお訪ねして、お話を聞かせて頂きました。以下がその記録です。

## 戦中、戦後の激動の時代を生きて

語り手 須田直吉 (昭和17年-1942 神師卒)  
聞き手 黒川鈴谷 (昭和35年-1960 国大卒)

黒川 今日暑い中またご多忙のところをお会いいただき、ありがとうございます。先ほどはいきなり牛舎に案内されて50頭の牛たちと対面し、ちょっと吃驚しました。牛たちのことはまた後で何うとして、まず師範時代のことからお聞きしたいのですが。師範に入学されたのは昭和何年ですか。

須田 私は昭和15年3月に旧制中学を卒業して、4月に師範学校に入りました。

黒川 すると先生は二部だったのですね。

須田 そうです。私は二部生でした。私が入学した学年では一部が1クラスで、二部が3クラスと二部生の方が多かったのです。二部生の出身中学は、小田原中学・厚木中学・秦野中学などが多かったです。三浦の方からも来ていましたね。

黒川 先生が入学された昭和15年には私はまだ小学校に入学していませんでしたが、そんな小さな子供にも生活に必要ないろいろな物が足りなくなっているのは感じられました。師範の生活でも、やはり物資不足の影響がありましたか。

須田 師範学校は全員寄宿舎に入りますが、その頃食堂での食事の量はあまり十分ではありませんでした。なにしろ若い時代ですから、空腹なのは応えましたね。町へ出て何か食べたいと思っても、鎌倉の町にはもうソバくらいしかありませんでしたね。

黒川 教育実習は今は1カ月ほどですが、当時はもう少し長くやったのでしょうか。

須田 私達の時は、3カ月実習に行きました。

黒川 師範の二部は2年で卒業ですから、昭和17年3月に卒業されたのですね。卒業してどこの学校に赴任されたのですか。

須田 藤沢市の村岡小学校(当時は国民学校)です。赴任して驚いたのは、男女共学なんですね。男女共学なんて今では当たり前ですが、当時は男子は男子組、女子は女子組と決まって



鎌倉に在った神奈川県師範学校 校舎

いましたからね。小さな学校で男女別学にするほど、児童が居なかったのです。

黒川 私が戦争中に疎開した瀬戸内海の島の小学校も、1 学年男女合わせて十数人で男女共学でしたよ。おまけに 2 学年 1 クラスの複式学級でした。

須田 なにしろ小さな学校で、師範を出た教員は私ともう一人の先輩しかいない。あとはみな代用教員なんです。だから運動でも何でも私が全部リーダーになってやりました。

黒川 それじゃあ、ずいぶん大事にされたでしょう。

須田 いやあ、皆をかき回して引っ張っただけだから、なんか変なの came と他の人には思われたらうね。

黒川 それで 1 年たって徴兵検査が済んでから、4 月に海軍に入ったのですね。海軍には志願したのですか。

須田 いや、別に志願したわけではなく、海軍に行くように命じられたのです。

黒川 ホームページのこの欄には、4 月に昭和 3 年卒業の川崎の堀内信行さん、6 月に昭和 4 年卒業の大久保正治さんと二人の方との対談を載せました。お二人とも短期現役の入隊は近衛歩兵連隊で、海軍に行った同級生は一人もいなかったとのこと。先生の時に海軍に入るように命じられたのは、なにか訳があるのでしょうか。

須田 昭和 3 年や 4 年の卒業というと、私達の大先輩ですね。その頃は不景気ではあったが、世の中はまだまだ平和でした。だから海軍もまだ所帯が小さく、兵員の数も少なかったのです。ですから師範の卒業生も全員が陸軍に徴集されたのでしょうか。ところが私達の卒業した昭和 17 年には、対米戦争は既に始まっていた。ですから海軍の予備の艦

艇も全て現役にして艦隊に配属され、それに伴って兵員の大増員が行われました。この大量の新兵を教育する要員として昭和 17 年春から師範学校の卒業生を海軍に集めたのです。そして三年ほどご奉公したら学校に戻り、海事思想の普及に努めよということでした。



横須賀海兵団の団門と兵舎

黒川 成る程、それで良く分かりました。個人の運命は世の中の大きな流れに影響されるのですね。

須田 師範の卒業生を、そういう目的でまとめて採用するというのは昭和 17 年 4 月から始まっています。ところが採用した師範卒業生の成績がとても良かったのです。何か教えても覚えは早いわい飲み込みも良い。計算はもちろん良く出来たし、字も達筆な者が多い、他の兵とは全然違

うということが分かって、翌年からは採用人員を大幅に増やしました。昭和 18 年 4 月の私の時からは、横須賀鎮守府で 800 人、(全国で 2,000 人位) が採用されたのです。

黒川 最初は横須賀の海兵団に集められたのでしょうか、師範の卒業生はまとめて教育されたのですか。

須田 そうです。師範の出身者は同じ分隊に集められました。海兵団の分隊長は兵から特進した年配の士官が多いのですが、私達の分隊長は海軍兵学校出のバリバリの将校で、教班長の下士官も優秀な人がそろっていました。

黒川 一般の徴兵はもちろん志願兵と比べても、師範出身者はレベルが上でしょうから海軍としても気を使ったのでしょうか。で、海兵団での教育期間はどのくらいだったのですか。



須田 4月から6月までの三カ月でした。

駆逐艦 秋雲 (基準排水量 2,070 トン)

黒川 やはり戦中なので、短期促成という感じですね。私の父も大正 11 年に横須賀の志願兵になったのですが、その頃の教育期間は五カ月だったようです。で、海兵団での教育が終わってからすぐ新兵教育をしたのですか。

須田 いや、すぐにはそんなことはしません。なにしろこちらがまだ新兵ですからね。最初は艦(ふね)乗り組みました。海軍ですから必ず一度は艦船に乗せるのです。

黒川 その場合、こんな艦に乗りたいという希望は出せるのですか。

須田 戦艦に乗りたいとか巡洋艦に乗りたいとか、艦の種類希望は出せます。私は家では長男ではない自由な立場でしたし、まだ若く張り切っていたので、一番活躍している艦に乗せてくれと希望しました。そしたら「よしきた」と乗せられたのが駆逐艦秋雲でした。

黒川 秋雲は排水量 2,077 トン、日本海軍の艦隊型駆逐艦の最終型「夕雲型」二十隻のうちの二番艦ですね。そりゃあ当時の最新鋭艦ですよ。

須田 艦長以下 250 名が乗り組んだ駆逐艦秋雲は、日米開戦以来ハワイ奇襲作戦、ミッドウェー海戦、ガダルカナル島への陸兵輸送と大活躍しました。南太平洋海戦では傷ついて漂流中の米空母ホーネットに僚艦巻雲とともに魚雷 4 本を打ちこんでとどめを刺しました。

黒川 ホーネットは、昭和 17 年 4 月 18 日に京浜地区を初空襲した時の空母ですね。ホーネットを撃沈したとき、先生は秋雲に乗っていたのですか。

須田 いや、撃沈したのは昭和 17 年の秋ですから、私はまだ乗っていません。その時に乗組だった師範で 1 級上の先輩に話を聞いたのです。私が参加した作戦は昭和 18 年 7 月のキスカ島撤退作戦からです。

黒川 えーっ、これは驚いた。あの有名なキスカ撤退作戦に参加されたのですか。レーダーを装備した有力なアメリカ艦隊が嚴重に包囲する北海の孤島から、陸海軍併せて約 5,200 名の将兵を全員無事に撤退させた作戦ですね。

須田 キスカの話をする前に、順序として秋雲に乗艦した時の話をしましょう。師範の卒業生



大砲分隊の師範同期生 5 人。前列右端が指導係の  
先任兵長。後列右端が須田先生。

で秋雲の乗り組になった人の数は、前年は 5 人でしたが私の時は 10 人になりました。本来ならば短期間で乗艦をかわり、いろいろな艦で経験を積んだ後で下士官となり新兵教育に従事するはずだったのです。ところが艦に乗せてみると、師範出身者はとても役に立って使いやすいので、艦長たちが手放さないのです。それどころかもっと乗艦させろということになったようなのです。秋雲に乗った同級生が前年に比べて 2 倍の 10 名になったのは、そんな事情があったようですね。

黒川 秋雲では、先生はどんな配置に就かれたのですか。

須田 私は大砲分隊で、艦橋の真下にある砲戦指揮中継所が配置でした。そこは射撃盤という

簡単なコンピューターのようなものがあった、そこに敵艦の速力〇〇ノット、自分の速力〇〇ノット、敵艦までの距離〇〇mなどの数値を入力するのです。すると大砲の照準が自動的にできて、砲術長が引き金を引くと6門の大砲から弾丸が飛び出すという仕掛けになっていました。

黒川 同級生は全員がその配置だったのですか。

須田 いやその配置には兵員が8人いましたが配属されたのは私1人で、他の同級生は主砲の砲塔などに配置されました。駆逐艦の武器には魚雷もあるので、水雷分隊に入れられた



キスカ湾内に入港した日本の巡洋艦

仲間もいます。師範出身者は優遇されていて、三か月に一階級昇進して一年後には下士官になった。一般の兵隊の進級はずっと遅いですから羨ましがられましたよ。

黒川 それはそうでしょうね。

須田 仕事もまだろくに出来ない癖に進級だけはする、けしからんというのでバッテリーで尻をだいぶやられました。なにしろ進級して他の配置に行くのなら

良いのだが、配置は変わらず進級だけするのだからね。でもそういう人たちも、後では「先生、先生」といって仲良くしてくれたね。

黒川 先ほどの話に出たキスカ作戦のことですが、その時のことを覚えておられますか。あの作戦は一度キスカの近くまで行ったが霧が薄くなってキスカ湾に突入せずに根拠地にもどりましたね。戻る決断をした司令官の木村昌福少将はだいぶ批判されたようですが、普通の兵隊さんはどう思ったのでしょうか。無理をしないで良かったと思ったか、それとも待っている仲間の兵隊のために、突入した方が良かったと思ったのか。どちらでしたか。

須田 キスカへ行ったのは昭和18年の7月ですから、私達は秋雲に乗ったばかりでまだ配置も決まっておらず、弾庫から弾を出して砲側まで上げる使役などをしていました。ですから話をする兵隊の仲間もまだ出来ていなかったし、そのあたりは良く分かりません。でもこの作戦で鮮明に覚えているのは、第二回目の作戦でキスカ湾に突入した時、湾内に垂れこめていたガスが不思議なことに艦隊入港と同時に、海面から50mくらいの高さまで消えてしまい、

見通しが良くなったことです。海岸から大発に乗ってくるキスカ守備隊の兵士が艦上に上がるための縄梯子を舷側から下ろしたことも覚えています。このとき秋雲に収容した将兵は陸海合わせて463名、秋雲の乗組員が艦長以下250名ですから乗組員の2倍近い兵士を乗せたのです。そこで少しでも重量が軽くなるように、艦に便乗する兵士たちに小銃などを海中に捨てるように言ったのですが、陸軍の兵隊はなかなか銃を捨てず、困りました。



艦隊入港を待つ、キスカ守備隊の将兵

黒川 当時の陸軍は兵器を異常に神聖視しましたからね。噂によると、キスカ駐留の陸軍の司令官峰木十一郎少将は、撤退の時に小銃を海中に投棄したことで、譴責処分を受けたそうです。ともかくこの時の撤退作戦は、島を取り囲んでいた米艦隊が弾薬補給のためにたった一日だけ包囲を解いた、ちょうどその日にキスカ湾に救援艦隊が入港し、滞在わ

ずか1時間ほどで全員を救出して風のように去ったのですから、それこそ神の御加護によるパーフェクトゲームと言えるでしょうね。もっとも戦って勝ったわけではないから完全勝利とは言えませんが。

須田 私の乗艦した駆逐艦秋雲は、キスカ撤退作戦の後はコロバンガラ島撤退作戦やヴェララヴェラ海戦などを戦い、ボルネオ島リング泊地を中心に物資輸送の護衛をしました。そして昭和19年4月11日、航空燃料を満載した特設水上機母艦聖川丸を護衛中、18時17分ミンダナオ島ザンボアングの沖で米潜水艦の雷撃を受けて沈没したのです。

黒川 その時のことを話して頂けますか。

須田 雷撃を受けたとき、私は前部兵員室にいました。この時もし私が艦の後部に居たら助からなかったでしょう。

艦はあっという間に沈みました。時間にして2~3分もあつたでしょうか。なにしろ駆逐艦の艦体の鋼板は厚さわずか4ミリと薄く、機銃弾が当たっても反対舷まで突き抜けてしまうほどです。そこに魚雷が命中したのですからたまりません。沈没してから味方の駆潜艇に救助されるまで一晩中泳ぎました。偶然に見つかった丸太を抱えて泳いでいる時、たまたま師範の先輩だった荻原兵曹と出会ったので丸太を譲ってあげました。

黒川 そんな時に、浮きになる丸太をよく譲ってあげましたね。

須田 水泳には自信がありましたからね。師範時代には由比ガ浜—稲村ヶ崎—材木座の遠泳コースをよく泳ぎました。

黒川 荻原さんが書いた「駆逐艦秋雲の思い出」という冊子によると、荻原さんも先生と同じ駆潜艇に救助されたそうですね。その後は内地に帰還したのですか。

須田 そうです。日本に帰って横須賀海兵団の教員になり、新兵教育に携わりました。荻原さんも一緒でした。

黒川 その後は戦争が終わるまで、横須賀でしたか。



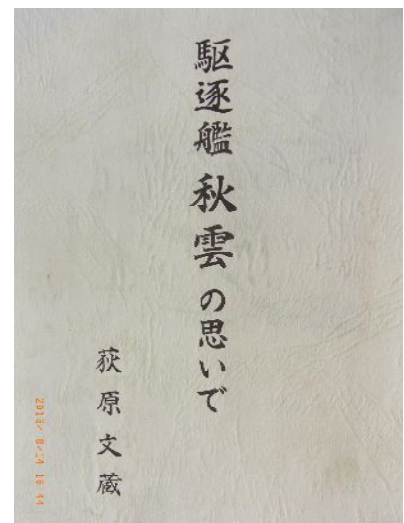
須田 そうです。8月15日の玉音放送も海兵団の兵舎で聞きました。でも放送がはっきり聞き取れなくて、何のことも良く分かりませんでした。夜になって、それまで灯火管制で暗かった兵舎にも町にも煌々と電灯が輝くを見て、初めて戦争は終わったのだと実感しました。

黒川 戦争が終わった時に横須賀に居られたのでは、じきに復員出来たのですね。

須田 そうです。九月にはもう家に帰っていました。

黒川 初任で赴任した学校に復職されたのでしょうか。

須田 藤沢の村岡小に戻りました。そしたら戻ったら暫くして、いつのことだったか記憶がもう曖昧になっているのですが、校長が鎌倉に講習を受けに行けと言うのです。行ってみたら戦争から無事に帰って来た同級生がたくさん来ていて、「何だ、敗残兵の集まりだな」と大



笑いしました。

黒川 そんな講習があったとは初耳ですが、その講習というのは何をやったのですか。

須田 京大の教授だとかいう人が講師で、「君たちは民主主義がどんなものか知らないから、それを教える」ということで、左翼的な話をさんざん聞かされました。

黒川 戦後、60年安保の頃までは左翼全盛時代でしたね。わたしも国大時代は左翼でしたよ。

須田 何日くらい講習を受けたのかな、もう記憶も薄れているのですが学校に帰ったら校長が、藤沢市の小学校の教員を全部集めるから講習で聞いてきた「民主主義」のことをそこでしゃべってくれ、と言うのです。

黒川 えーっ、しゃべったんですか。

須田 しゃべりましたよ。聞いてきたことの受け売りだけどね。私もまだ若かったし、戦場生き残りで怖いものなしだし、周りには師範の出身者はあまり居なかったので張り切っていたしね。「よし、やってやる」とやりました。

黒川 でも前に伺ったところでは、昭和21年の3月で教職を退かれたのでしょうか。それはどうしてですか。

須田 私には兄がいたのですが、その兄が戦死してしまったのです。それで父が「兄貴が戦死してしまって家を継ぐ者がいない。このままでは家も無くなっておまえも帰る家なくなるぞ。」と言うのです。つまり私に教師を辞めて、家で百姓をやれということなのです。それで仕方なく教師を辞めて百姓になりました。

黒川 そのことは私も今回初めて知りましたが、友松会会員としてはずいぶんユニークですね。普通の会員は、定年まで或いは定年近くまで教職にありますからね。

須田 私も百姓になったばかりの頃は大変でしたよ。家は農家でしたが私は師範に進んで先生になるつもりでしたから、農家の仕事を本気でやったこともなかったのですが、学校を辞めてからは真剣でした。教職に就いた師範の同級生に負けたくないとも思いましたし。なにしろ百姓に比べて先生の給料は良かったし退職金はあるし、そ

れにその頃は30代後半から40くらいで校長や教頭になったからね。うかうかすると同級生と友達つきあいが出来なくなると思って、百姓で頑張ったのです。

黒川 私達の頃は、教師の給料はそんなに良いものではありませんでしたが。もっとも問題な



須田牧場の50頭の乳牛たち



カルガモを使った無農薬有機農法の米づくり

のは金とか地位とかでなく、生き甲斐のある生活をしているかどうかですね。

須田 とにかくいろいろ努力して頑張りましたよ。なにしろ始めた頃は鍬と鎌だけで他に何もなかったが、六会地区で一番じめにトラクターを買ったのは私のうちでした。この辺は昔は小さな田圃ばかりだったが区画整理をして広い田圃にしました。無農薬の米作りをしたのも藤沢ではうちが一番始めでした。藤沢市内の全小学校三十何校の学校給食では、うちの無農薬栽培の米を使っています。うちの米だと子供たちがご飯を残さないと評判が良く、十年以上使ってもらっています。その間、値上げもしていません。



黒川 ずいぶんいろいろと苦心されたのですね。

須田 そう、やっぱり同級生に負けたくないという

気持ちがあったからね。頑張ったのです。昭和30年ころには乳牛も始めました。最初は1頭から始めて、現在の50頭まで増やしました。その頃は乳牛が儲かった。うちがこれまでに成れたのも乳牛をやったからです。一時は乳牛農家が六会だけで100軒以上ありました。でも今は15軒ですよ。なにしろ設備投資に金がかかるから。飼料のトウモロコシを貯蔵するサイロ1つで1千万円、トラクター1台で1千万円するからね。

黒川 今日はいろいろなお話を聞かせて頂き、ありがとうございました。戦争中の駆逐艦秋雲の話も面白かったですが、特に興味があったのは

戦後に教職を離れた後の農業経営のお話でした。須田

先生くらいの年齢の方ではずっと教職におられた方が多いので、そういう点でもちょっと珍しいと思います。それにもかかわらず、と言うのもちょっと変ですが、卒寿の年齢の時に友松会の総会に出席して挨拶をされるというのは、教育界を離れても同級生との交流がずっと続いていたからでしょう。友松会も最近の若い人は教育以外の別の世界に進む人が多いのですが、そういう時代に須田先生の事例はとても参考になることではないかと思いました。どうか今後もお元気で、時々友松会の会合にもお出かけください。

